第１回オンライン・ボーダレス映画祭報告書

発行・問合せ先：特定非営利活動法人 地球対話ラボ
〒 143-0023 東京都大田区山王 3-12-5
TEL : 070 - 5015 - 7180

主催：特定非営利活動法人地球対話ラボ、アチェ・コミュニティアート・コンソーシアム、アチェ・ドキュメタンタリー
助成：国際交流基金アジアセンター
後援：在日本インドネシア大使館、インドネシア・アチェ州政府

第一回 オンライン ボーダレス映画祭
Bagian Pertama Festival Film Online Tanpa Batas

2020 年
11 月 7 日 ㊏～11 月 15 日 ㊐
7 November (Sabtu) s.d 15 November (Minggu), 2020

世界にはさまざまな「壁」があります。目に見えるものもあれば、目に見えないもの、あることすらわからないものもあります。そうしたものを見えるようにし、それがいかなるものなのかをともに考え、乗り越えていくすべを見つけていこうというのが「ボーダーレス映画祭」です。

第一回として日本とインドネシアの間で行われた本映画祭は、そうしたテーマとともに、コロナ禍のために生まれた「壁」について越えるすべを協働しながらつくりだしていくという、二重の意味での「ボーダーレス」への取り組みだったと言えるでしょう。

2020 年 11 月 7 日～15 日の会期中、在日本のインドネシア大使館とインドネシア・アチェ州政府から後援をいただきながら、特設サイトでドキュメンタリー映画を 11 本、オンラインイベント関連の招待作品を 2 本、計 13 作品を期間限定でオンラインで上映するとともに、「オープニングセレモニー」、3 回にわたる「オンライン・マスタークラス～語り合い」、そして参加監督が語り合う「ディレクターズ･ラウンドテーブル」の 5 プログラムをすべてオンラインで開催いたしました。

公式 Facebook ページへのリーチ数は 2020 年末時点で約 4 万 2 千、投稿のエンゲージメントは約 4 千 2 百、ページ自体への「いいね！」が 204、フォローが 251 にのぼりました。YouTube に公開された動画の再生回数は、『気仙沼のインドネシア人～実習生のふるさと編』（詳細は次項参照）が最多で、2021 年 1 月 3 日現在で 1,592 でした。

日本・インドネシア双方の主催者・参加者からは、「コロナ禍で何もできないとあきらめていた中で、やろうと思えば何かができるのだと示してくれた」といった感想がよせられ、実際、インドネシア側主催者らはこの後、独自の映画祭の企画を始めるといった成果を生み出しました。一方、日本側主催者らは、今回の経験を国境を越えた遠隔地間で、特に地方のコミュニティ同士がオンラインで結びつくための「新しい手法」としてとらえ、「オンラインおしゃべりひろば」を 2021 年 2 月から開始。気仙沼や仙台、浜松、埼玉といった日本の地方都市とバンダアチェやバンドゥン、ポノロゴといったインドネシアの地方都市とが継続してつながる場が構築されつつあります。

上映作品とマスタークラス

『Playing between elephant / 象の間の戯れ』
監督：Aryo Danusiri 、2007 年 90 分
大津波の後のインドネシア・アチェで復興のための住宅建設に振り回される人々。観察映画的手法でその迷走を追う。2007 年ジャカルタ国際映画祭「最高の人権映画賞」、ブリュッセル独立映画祭「ベストドキュメンタリー賞」受賞。監督はインドネシアで観察映画を作った最初の映画作家であり、本映画祭ではオンラインマスタークラス～語り合い①テーマ「ドキュメンタリー：観察 vs 協働？」のメインゲストも務めた。

『気仙沼のインドネシア人 / Oran Indonesia di Kesennuma』
監督：門脇篤 2020 年 84 分
日本の港町・気仙沼に暮らすインドネシアからの実習生と仲良くなった監督は、彼らの故郷を訪問してみようと思い立つ。両地を双方向に結ぶアートとしてのドキュメンタリー。次項から 6 ページにわたって紹介あり。

『Senja Geunaseh Sayang / グナセサヤン 老人ホームの夕暮れ』
監督：Maulidar & Astina Ria 2016 年 19 分
老人ホームで老いを過ごすお年寄り。長男を待つ母。忘れられた人がいる事実を国を超えて紹介するドキュメンタリー。

『氷の贈り物～海と生きる・気仙沼 / The gift of Ice』
監督：千葉清人 2020 年 7 分
津波に襲われた港町・気仙沼にある「氷の水族館」。水産業には欠かせない氷産業も津波の被害を受けたが…。

『Tank Akhe / 最後の土』
監督：Fadhilah Sari & Nova Andiyani、2016 年 15 分
州都バンダアチェの土の皿を作る職人。大都会には建物が建ち並び、土の入手も困難に。忘れられつつある人々と文化を紹介したドキュメンタリー。

『Smong Purba / 古代の津波』
監督：Azhari 2019 年 24 分
2004 年にインドネシア・アチェを襲った大津波。離島に津波伝承の歌が残されていたため、島民は高所に逃れて助かった。過去にも大津波が起きていた事実が、古文書や地質学からも明らかになりつつある。

『きょうも元気だ ごはんがうまい！ さくらんぼ共生園の食って呑んだ一年間の記録 』
監督：佐藤広一 2013 年 105 分
心身障がい者福祉施設で流れる豊かでゆっくりとした時間。その一年間を記録した日常観察型ドキュメンタリー。

『1880mdpl / 海抜 1880m』
監 督：Riyan Sigit Wiranto & Miko Saleh、2016 年 29 分
1997 年にできたスハルト時代の移住村。森林に新しい土地を拓くのも難しい。ジャングルに入植しよう、楽園に行こう、と誘われた移民の意味を問う。

『Klinik nenek / おばあさんの診療所』
監督：Sonya Anggi Yani & Oka Rahmadiyah 2016 年 20 分
アチェの伝統的な治療師。自然の恵みから伝統的な治療薬を作るおばあさんの日常をユーモラスに見つめる。

『Petani Pala / ナツメグ農家の笑顔の喪失』
監督：Zia Ulhaq Hasbi & Wildatun Rizqi 2016 年 9 分
ナツメグはアチェ南部の経済基盤であり地域の象徴だが、その木の大量死が起きる。ナツメグ農家が探る次の道。

『Fragile / 儚さ』
監督：Bebbra Mailin 2015 年 10 分
マレーシアのサバ州に住むインドネシア人家族の厳しい生活を、歌手になるという夢を持つ 12 歳の少女の視点から描く。

『KOSONG - コソン 』
監督：Chonie Prysilia Sigar 2017
世界最大の人口を抱える島、インドネシア・ジャワで、子供がいない女性の不安を物語るアニメーション・ドキュメンタリー映画。
近年インドネシアで注目されるアニメーションを使う手法で作品をつくった監督は本映画祭ではオンライン・マスタークラス～語り合い②テーマ「アニメーション・ドキュメンタリー」のメインゲストも務めた。

『Gimbal ジンバル』
監督：Sidiq Ariyadi 16 分
縮れ髪の子どもの髪を切るジャワの風習。ある夫婦が何とか多額の費用を工面して子どもに儀式を受けさせようとする。子どもの幸せを願う若い夫婦の姿。

オンラインでの語り合い
識者が登場するマスタークラスは 3 回、参加した監督らが語り合うラウンドテーブルが 1 回実施された。

上映作品
ピックアップ
※6ページにわたり
趣旨やあらすじを
ご紹介します

気仙沼のインドネシア人 実習生のふるさと編

インドネシア、東ジャワのポノロゴにあるトレーニング施設 LPK BNS でのトレーニング風景

出品作について

アートにせよ、被災者や障害者にせよ、「見せる人」と「見せられる人」、「支援する人」と「支援される人」と、ひとがどちらかに分かたれてしまうことに疑問を感じ、そうでないことをしようと取り組んできました。

「気仙沼のインドネシア人」は、スマトラ沖地震の被災地であるインドネシア・アチェと交流する中で、インドネシアという日本とは全く違った世界と出会い、そのインドネシアから自分の地元に外国人労働者というかたちでたくさんの若者がやって来ていることを知って始まったコミュニティアート・プロジェクトです。2018年に最初のインタビューを行い、本作の前に「「気仙沼のインドネシア人～ファーストコンタクト編」「気仙沼のインドネシア人～みなとまつりインドネシアパレード編」の２本のショート・ムービーがあります。インタビューなど編集前の素材も同意がとれたものについては公開しています。

実習生は単に「働かされる人」や「撮影される人」ではなく、自ら仕事や人生を選び取り、その生き方を世界へと投げかけていく存在です。私は彼らや彼らに関わる人たちとどんな関係を結べるだろうと考え、映画を作っていくことにしました。完成したものを見せるのではなく、常にそこに関わることができ、常に新たなアイデアが試されるような場にしたいと考えています。オンラインがこれほど身近になった世界です。ぜひ疑問に思ったことや、試したいアイデア、そこから浮かび上がったあなたの人生について教えてください。

●監督の連絡先
kad@kadowakiart.com
Facebook: atsushikadowaki

▲本作はこちらからご覧いただけます。

監督プロフィール
門脇篤

1969 年仙台市生まれ。東京外国語大学アラビア語学科卒。鉄鋼会社に就職後、２年弱で退社し、写実的な平面作品を制作発表していたが、2003 年、仙台の商店街で行われたアートプロジェクト「TANABATA.org」に参加したことがきっかけで、「自分ではない誰かと何かおもしろいことを行う」コミュニティアートを各地で展開するようになる。東日本大震災後は、仮設住宅・復興住宅での「おしるこカフェ」やアートを仕事にする福祉サービス事業所「アート・インクルージョン・ファクトリー」、スマトラ沖地震の被災地インドネシア・アチェと東北を結ぶ「アチェ＝ジャパン・コミュニティアート・プロジェクト」などを企画・運営。

上映作品「気仙沼のインドネシア人」

イントロダクション
introduction

みなさん、こんにちは。「気仙沼のインドネシア人」をつくっている門脇篤です。

みなさんは、映画を見たとき、「ここを変えたい」と思ったことはありませんか。私はこの映画でそれをやりたいと考えています。

この映画は最終版ではありません。ここからつくりあげていくファーストバージョンです。

私は 20 年近く前にアートの世界に入りました。

そこで違和感をもったのは、作り手と鑑賞者とがはっきりと分かれていることでした。そうした境がない取り組みをしたいとやってきました。

一昨年からドキュメンタリーを発表しています。映画づくりでも、作り手と受け手を分けないやり方でやりたいと思っています。これはその最初の取り組みです。

「もっといいアイデアがある」「自分の映像を追加してほしい」とあなたが思ったら、それを実現することができるかもしれません。

いっしょに作りませんか。そういう気持ちで見てください。

「気仙沼のインドネシア人～実習生のふるさと編」は、コロナが蔓延する直前、主に 2021 年 1 月～2 月に気仙沼とジャワ島で、プロデュースも担当する地球対話ラボの渡辺裕一氏と監督担当の門脇によって撮影されました。その後、8～10 月にかけて門脇が編集作業が行い、最初のバージョンが誕生。渡辺氏および渡辺氏と同じく地球対話ラボでテレビ関連の仕事に従事する坂井秀之氏に見てもらい、さまざまな指摘をいただいたものの、あまりに修正箇所が多かったことと、おなじようにいろいろな意見をもらって反映させることをプロジェクトとして行うのがいいのではないかと考え、門脇が見せたいように作った「ホームムービー」状態をそのまま見せる、ただし、それが意図的なものであることを冒頭に表明する、ということでこの冒頭部分が挿入され、本映画祭で公開されました。

気仙沼

私の住むまち仙台から高速バスで３時間。気仙沼は三陸の真っ只中にあります。

気仙沼のインドネシア人たちと知り合うようになって、私は彼らがいったいどんなところから日本を目指すようになったのだろうと思うようになりました。

ジャワ島

これまでにインタビューした実習生たちは、ジャワ島のあちこちから来ていました。しかし新しくやって来た実習生の多くが「ポノロゴ」という東ジャワの町出身であることに私たちは気づきました。まずこの町を訪ねてみることにしました。2020 年 2 月、コロナが深刻化するほんの少し前のことです。

ポノロゴのモスクですすめられた揚げ物を食べる監督の門脇

ポノロゴ

Ponorogo

ポノロゴは東ジャワで最も多く海外へ出稼ぎを出している町です。日本へは現在 500 人ほどが働きに出ていると言います。町の名物はピーナッツソースののったサテ・アヤム。町で一番人気の店には、ユドヨノ前大統領もよく訪れるそうです。もう一つの名物、伝統の踊り「レオ・ポノロゴ」については、私たちは思いもよらぬ体験をすることになります。
私たちはまず、気仙沼に住むふたりの技能実習生、リナさんとスシローさんの実家を訪ねることにしました。

リナさんの家

母シティさん「私が初めてブルネイに働きに行ったのが 97 年。リナが 2 歳のときでした。その後、中東にも出稼ぎに行きました」

父ジュマリさん「ここには出稼ぎに行く人が大勢います。出稼ぎに行くのは、親にたよることができないけれど、夢を実現しようと努力する我々のような人間です」

スシローさんの家

父ワルサノさん「息子は前々から日本にあこがれていました。ある日突然、『もし日本へ行きたいと言ったら許してくれるか』と聞かれました。許すとこたえましたが、私には力がない。誰かが支える必要がありました。彼の夢を実現に近づけたのはふたりの姉たちでした。
２年間かかりました。４回失敗して５回目でうかり、日本行きが決まりました」
母シルムさん「健康で帰って来てほしい。それだけです」

LPK BNS

技能実習生をめざす若者たちは、まず地域にある「LPK」と呼ばれるトレーニング施設で日本語や日本のマナーなどについて学びます。私たちは、ポノロゴ市郊外にある「LPK BNS」を訪ねました。

ヒュディ・セトヨノ校長

「LPK BNS には 12 人のスタッフがいます。2 人が大学で日本語を学んだ先生で、残りは元日本への実習生、そして 2 人の事務職員です。2012 年の設立からすでに 650 人が日本へ向けて旅立ちました。
ポノロゴにはめだった産業もなく、仕事がないのが現状です。スラバヤやジャカルタに働きに出ても、事業を起こすのは難しい。唯一の方法が海外へ働きに出ることなのです。
ここには「アイム・ジャパン」向けのコース、「コープ・インドネシア」向けのコース、そして、介護職のためのコースの３つのコースがあります。
日本に行けない若者はだいたい 10% くらいいます。それはダメだったというよりも、うかるまでつづけられなかったためです。ここではうかるまで教えますが、若者たちがいろいろな理由でつづけられないのです」

レオ・ポノロゴ

ポノロゴ市では、LPK BNS と連携し、周辺を「日本文化村」にしようという動きがあります。道路が整備され、その「開通式」が予定されていましたが、我々が訪れることを知って、急遽日程を我々の訪問に合わせてくれることになりました。祝い事と言えば「レオ・ポノロゴ」。我々ははからずもこのポノロゴ名物を間近で体験することとなりました。

コープ・インドネシアのトレーニング施設中庭。奥に見える建物が寮。先生たちの宿舎も敷地内にあり、想像していたのとは違ってアットホームな雰囲気。

ジャティナンゴル

Jatinangor

次に我々が向かったのは、バンドゥンに近いジャティナンゴルにある送出機関「LPK コープ・インドネシア」。インドネシアには国営の送り出し機関「アイム・ジャパン」のほかに、こうした民間の送り出し機関が数多くあると言います。

LPK コープ・インドネシア

日本の企業から、『こういう人がほしい』という要望が、送り出し機関である「LPK コープ・インドネシア」に来ます。その情報をポノロゴの「LPK BNS」のような地方の LPK に流します。地方の LPK は生徒を準備し、送り出し機関で試験を受けます。

試験に合格した生徒たちは地元に戻って日本語教科書の第１章から第 10 章までを学び、送り出し機関へやって来ます。
ここでは朝から晩まで３ヶ月間、第 11 章から 33 章までの日本語学習と体力づくりなどのカリキュラムを３ヶ月間行います。全寮制で、日曜以外は外出できません。

３ヶ月のトレーニングが終了すると、いよいよ日本滞在のための申請書類を作成します。
生徒たちはいったん地元へ戻ってあいさつなどの準備を行い、その後、日本へと出発していきます。

ププン・マシトー先生

「実習先の企業は最初の試験で決まります。企業が直接面接します。実習生から実習先の場所の希望はときどきはありますが、早く日本へ行きたいのであまり場所にはこだわらないようです。
企業側からはこの前採用したような人がほしいので、友達や親戚を探して欲しいといった要望があったりします。そういうことからポノロゴの人が気仙沼で増えたのではないでしょうか。
ポノロゴは外に働きに出ることに積極的ですね。日本へ行くことに関心をもっている若者は多いです。
逆にここ西ジャワなどでは日本企業からの要請はあるのですが、インドラマユやスカブミなどの一部の例外を除けば海外への出稼ぎには消極的です」

気仙沼行きが決まった若者たち（撮影時）

アグン・ジュナエディさん

「気仙沼は、仕事があるからと学校から勧められ応募しました。私の故郷のケブメンは小さな町です。映画館さえありません。
家から海まで自転車で 10 分。若者がすることといえばジョギングやサイクリングくらいのものです。
ジャカルタで働いているときに友達に教えてもらったポノロゴの「LPK BNS」でトレーニングをしました。ポノロゴでの費用は自分でまかないましたが、ジャティナンゴルでは費用が足りなくなり、両親に応援してもらっています。
気仙沼にいる友達からは「早くこっちに来いよ」「遊びに行こうよ」と連絡が来ます」

オクタさん

「父が台湾に 10 年間、働きに行っていました。親戚のお姉さんは日本で、親戚のお兄さんはマレーシアで働いています。
ジャティナンゴルでのトレーニングは、最初は辛かったです。でもなぜここに来たのかを考えるようにしました。日本でどういう生活が私を待っているか、そのための準備なのだと考えればこれくらいは大丈夫と思えるようになってきました」
※オクタさんはその後、気仙沼ではなく石巻での実習が決まり、2021 年 6 月現在、石巻で実習を行っている。

歓迎の踊り

撮影２日目の朝､施設を訪れると、「昨日お見せできなかったから」と我々への「歓迎の踊り」が始まりました。
すごい迫力でした。

帰国した実習生たち

"Jisshusei" yang kembali ke kampung halamannya

最後に私たちは、気仙沼から実習を終えてインドネシアのふるさとへ帰った３人の元実習生を訪ねました。

クラーテン

ヘル・シスワントさん

中部ジャワ、クラーテン出身。高校卒業後、バタムやジャカルタで働く。2016-2019 年、技能実習生として気仙沼の菅原工業へ。実家は代々つづく米作り農家。

「インドネシアに帰ってからは、ほかの若者たちといっしょにオーガニック農法のコミュニティに参加しました。ジョグジャカルタのコミュニティで２ヶ月半の間、有機農法や無農薬農法についてのクラスを受講し、今はそこで学んだことを自分の田んぼで実践しています。

この村には特徴という特徴はありませんが、努力して先進的な農業で有名にしていきたいですね。

気仙沼で一番思い出すのは現場の寒さです。あれはヤバかった」

アリ・ウスマンさん

中部ジャワ、テガル出身。高校卒業後、カリマンタンやブカシで働く。2016-2019 年、技能実習生として気仙沼の菅原工業へ。実家は代々つづく赤たまねぎ農家。

「今は赤たまねぎに専念しています。輸出をしたいです。実習生のころ、自分で料理をしていましたが、そのときに赤玉ねぎの値段がとても高いことに気づいたのです。

また海外に働きに行きたいですね。仕事ならドバイ。ドバイでは溶接の仕事がたくさんあると聞いています。」

テガル

カラワン

サイフル・シディックさん

中部ジャワ、チラチャップ出身。高校卒業後、地元の LPK に通い、2016-2019 年、技能実習生として気仙沼の菅原工業へ。

「インドネシアに帰って、すぐにインドネシアの菅原工業に勤めましたが、３ヶ月で辞めてしまいました。現場の仕事がしたかったのですが、デスクワークしかなくて。今は日系の車の工場で働いています。

日本で実習して帰れば簡単に仕事が見つかるなんて思うのは大間違いです。日本でどんなに高いスキルを身につけてもインドネシアの企業がそれを求めていなければ意味がありません。インドネシアではすぐれた意見に耳をかす人は少なく、スキルであっても活かすことが難しいと感じています」

上映作品「気仙沼のインドネシア人」

エピローグ

epilogue

よくわからないものを不安ではなく、「未来」と受け止める、その姿勢は、ほかのいろいろなものを帳消しにしてもあまりある、大切にしていきたいものだと私は思います。

コロナで世界は大きく変わりつつあります。人と人との距離が変わり、知らない人、自分とは違う考えをもった人とわかりあうことが、これまでよりいっそう難しくなっていくのかもしれません。

そんなとき、日本という未知の国に暮らすインドネシアの人々、そして、彼らとともに生きる気仙沼の人々、ここに私は「未来」を垣間見ることができるような気がします。

さまざまな「壁」があっても、それをただの「壁」にせず、「扉」にしていくことが、私たちにはできる。それこそが「未来」そのもののように私には思えるのです。

ジャカルタ（日曜日のホコ天、2020 年 2 月 23 日）